様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０５２８
研究課題名（和文）言語少数派生徒と日本人生徒の学び合いを活かした在籍級の授業モデル作りに向けて
研究課題名（英文）Developing a learning model utilizing a collaborating learning of minority-language students and Japanese students
研究代表者
清田　淳子（KIYOTA JUNKO）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：30401582

研究成果の概要（和文）：
本研究は、公立中学校における取り出し支援から在籍級の入り込み支援に至る一連の学習支援を対象とし、言語少数派生徒が在籍級の学習活動に参加するための手立てと課題を探ることを目的とする。研究の結果、取り出し支援で母語を活用した先行学習を行い、引き続いて在籍級において母語支援者による入り込み支援を行うことで、日本語力が不十分な言語少数派生徒でも在籍級授業で日本人生徒と協働的に学べることがわかった。

研究成果の概要（英文）：
The theme of this research is a comprehensive learning support for minority-language students; both outside and inside the class. This research aims to identify an effective procedure of supports, focusing on the participation of minority-language students into their own class. By examining the result, it turned out that minority-language students; even with limited Japanese language proficiency, were able to participate in their own class learning collaboratively with the Japanese students.This was with the assistance of mother-tongue supporters during the class, after the preparatory learning in their mother-tongue outside the class.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：年少者日本語教育、教科学習支援、在籍級、入り込み支援、母語

１．研究開始当初の背景

日本社会の急速な国際化や法律の改正に伴い、「言語少数派の児童生徒」（外国から来て日本で暮らす、日本語を母語としない子ども）が増えている。子どもたちはできるだけ早く日本語を習得して在籍級の授業に参加することが期待されるが、教科学習場面で要求される日本語の習得には長い時間がかかるとされる。

言語少数派の児童生徒の教科理解を促すために、現在では、具体物や体験を支えに学習活動を進める「JSL カリキュラム」（文部科学省 2003、2007）、子どもの日本語力のレベルに合わせて教科書本文を易しく書き直した「リライト教材」（光元 2006）、そして、子どもの母語を活用して教科理解を促すとともに、母語そのものの保持・伸長をめざす「教科・母語・日本語相互育成学習」（岡崎 1997）などによる取り組みが積み重ねられつつある。

しかし、これまでの研究の中心は学校の取り出し授業や地域の支援教室など言語少数派生徒のみを対象とした学習支援を扱っており、在籍級（日本人生徒と言語少数派生徒が在籍する教室）を対象としたものではない。学習支援は言語少数派生徒が在籍級の授業に参加できることをめざして行われているものの、在籍級そのものをフィールドとした研究はほとんど報告されていない。そこで本研究では、取り出し支援から在籍級の入り込み支援に至る一連の学習支援を対象とし、言語少数派生徒が在籍級の学習活動に参加するための手立てを探る。

２．研究の目的

本研究では、公立中学校における取り出し支援から在籍級の入り込み支援に至る一連の学習支援を対象とし、研究課題（1）～(4)の追究を通して、言語少数派生徒が在籍級の学習活動に参加するための手立てと課題を探る。

（1）母語を用いた取り出し支援において、支援者はどのような役割認識をもって支援を進めているか。

（2）母語を用いた取り出し支援に対し、学校教員の意識はどのように変容しているか。

（3）在籍級の入り込み支援の中で、母語支援者はどのように子どもを支えているか。

（4）母語を活用した入り込み支援において、子どもはどのように在籍級授業の内容理解を進めているか。

３．研究の方法

(1) 学習支援の実施及び参与観察は横浜市の公立中学校に協力を求め、以下の項目について継続的に資料を収集し、分析を行う。

① 国際教室では「教科・母語・日本語相互育成学習」(岡崎 1997)に基づき、母語を活用した学習支援を週 1 回、継続的に実施し、授業の談話データを収集する。

② 在籍級では学期に 1～2 回の入り込み支援を実施し、授業の談話データを収集する。その際、教科担当者の協力を得てペアやグループ活動を組み込んだ授業を展開する。

③ 言語少数派生徒、母語支援者、国際教室担当者、教科担当者に対して、定期的に半構造化インタビューを行う。このうち担当教員については PAC 分析の手法を、母語支援者については MGTA を用いて、役割意識や母語活用に対する意識の変容を探る。

④ 在籍級の授業における談話データをもとに、言語少数派生徒の参加の様子を明らかにする。また、入り込み支援者のスキャフォールディングについて検討する。

(2)研究体制

本研究は、大学関係者（申請者、大学院修

了生、院生を含む)、中学校教員(国際教室担当者、教科担当者)、及び地域の支援者（母語支援者〈英語・中国語〉、日本語支援者）の三者が、相互に連携を図りながら学習支援を展開し、そこで得たデータをもとに研究を進める。

４．研究成果

本研究の成果を、「2 目的」の項に示した 4 つの研究課題に沿って、以下に示す。

まず、課題（1)「母語を用いた取り出し支援において、支援者はどのような役割認識をもって支援を進めているか」について、子どもの母語ができる日本人支援者は、「子どもが母国で培ってきた既有知識を周囲に伝える」「母国の学校教育と日本の学校教育の違いから、誤解が生じていることを周囲に伝える」という役割意識を形成していることがわかった。このような役割意識を形成した背景として、子どもの母語が話せる支援者が通訳等の副次的な役割ではなく、支援の主体となって母語支援を行ったことが指摘された。

次に、課題（2)「母語を用いた取り出し支援に対し、学校教員の意識はどのように変容しているか」では、2 名の国際教室担当教員は、母語を活用した支援は生徒たちの読解力の伸長に効果があると考え、異なる母語同士の生徒がグループ学習を行うことの効果を高く評価し、同時に生徒とともに教員自身も楽しみながら授業に取り組むようになっていた。また、「教科・母語・相互育成学習」モデルによる取り組みは、教員自身の母語である日本語を問い直す機会ともなっていた。さらに、教科学習支援を生徒の母語で行うことは、時間的制約がある中学校において効率的な支援方法であるという意識を生んでいることがわかった。

課題（3)「在籍級の入り込み支援の中で、母語支援者はどのように子どもを支えているか」では、国語の一斉授業に入り込みを行った母語支援者は、授業内容の理解、日本語の表記や表現の習得、そして学習ストラテジーの獲得を促すスキャフォールディングを用いて、また、学習意欲を喚起したり、子どもと授業者の仲介を図ることで子どもの授業参加を支えていることがわかった。母語支援者は「先生の通訳」というイメージでとらえられがちであるが、授業の展開を見据えつつ子どもの状況に応じた支え方を工夫するなど、主体的かつ創造的に子どもを支えていることが認められた。

一方、〈手紙交換活動〉〈五行詩交換活動〉というグループ活動場面においては、母語支援者は、手紙や作品の理解と鑑賞を対象生徒と共に進め、日本語の表記や表現の習得を促し、学習意欲を喚起し、さらには授業者や日本人生徒との間を仲介するスキャフォールディングを用いていることがわかった。これらのスキャフォールディングには、一斉授業の場合とは異なり、①対象生徒と日本人生徒双方の作品を中国語から日本語へ、日本語から中国語へと翻訳している、②対象生徒の日本語実践を 4 技能にわたって助けている、③対象生徒と日本人生徒をつないでいる、という特徴が認められた。

最後に、課題（4)「母語を活用した入り込み支援において、子どもはどのように在籍級授業の内容理解を進めるか」について、対象生徒は入り込み支援者のサポートを受けながら、自分が本来持つ社会的・認知的・情意的ストラテジーを統合的に発揮し、能動的に教室活動に参加していることが分かった。

以上のことから、取り出し支援で母語を活用した先行学習を行い、引き続いて在籍級において母語支援者による入り込み支援を行うことで、日本語力が不十分な言語少数派生

徒でも在籍級授業に実質的に参加できることがわかった。

そして、取り出し支援や入り込み支援を行う母語支援者は「先生の通訳」ではなく、主体的かつ創造的に子どもを支えていることが認められた。支援者がこのような働きをするためには、支援者の教材研究や子ども理解を助けるような周囲のサポートと、支援者同士あるいは学校教員とのコミュニケーションの場を保障していくことがきわめて重要であることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①清田淳子（2012）「在籍級への入り込み支援における母語支援者のスキャフォールディング」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第 8 号（印刷中）（査読有）

②劉雲霞（2012）「来日間もない外国人生徒の在籍学級国語科授業参加の試み―『教科・母語・日本語相互育成学習モデル』による実践から―」『人間文化創成科学論叢』第 14 巻（印刷中）（査読有）

③清田淳子（2012）「入り込み支援における母語支援者のスキャフォールディング―グループ活動の場合」『平成 21～23 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究(C)）言語少数派生徒と日本人生徒の学び合いを活かした在籍級の授業モデル作りに向けて』pp.104-123（査読無）、巻数無し

④高梨宏子（2012）「国際教室担当教員が持つ「生徒の母語を用いた授業・支援」に対する意識－PAC 分析調査から－」『平成 21～23 年度科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究 C）言語少数派生徒と日本人生徒の学び合いを活かした在籍級の授業モデル作りに向けて』pp.136-158（査読無）、巻数無し

⑤宇津木奈美子、三輪充子、山口優希子（2011）「母語を活用した子どもの学習支援における日本人支援者の役割認識」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』（査読有）

⑥王植（2011）「『教科・母語・日本語相互育成学習モデル』に基づく支援活動における子どもと母語話者支援者の『横の関係』－母語支援場面に着目－」2010 年度お茶の水女子大学大学院日本語教育コース修士論文（査読無）、巻数無し、pp.49

〔学会発表〕（計 3 件）

①宇津木奈美子、三輪充子、山口優希子「子どもの教科学習支援における子どもの母語ができる日本人支援者の役割認識」日本語教育学会実践研究フォーラム、横浜国立大学(神奈川県)、2011 年 7 月 30 日

②清田淳子：「在籍級への入り込み支援における母語支援者のスキャフォールディング」『2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.283-284、 日本語教育学会春季大会、東京国際大学（埼玉県）、2011 年 5 月 22 日

③清田淳子、宇津木奈美子、高梨宏子、三輪充子、山口優希子、劉雲霞「言語少数派生徒の在籍級の授業参加をめざす学習支援環境の構築－『教科・母語・日本語相互育成学習』を枠組みとして」『言語文化と日本語教育』41 号、口頭発表要旨、pp.82-84、日本言語文化学研究会、お茶の水女子大学（東京都）、2010 年 12 月 11 日

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
研究成果報告書「言語少数派生徒と日本人生徒の学び合いを活かした在籍級の授業モデル作りに向けて」（203 頁）の作成、100 部

６．研究組織
(1)研究代表者
清田　淳子（KIYOTA JUNKO）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：30401582

【研究協力者】
宇津木　奈美子（UTSUKI NAMIKO）
帝京大学・講師
王　植（WANG ZHI）
お茶の水女子大学大学院・修了生
高梨　宏子（TAKANASHI KOUKO）
お茶の水女子大学大学院・院生
三輪　充子（MIWA MITSUKO）
東京医科歯科大学・講師
山口　優希子（YAMAGUCHI YUKIKO）
お茶の水女子大学大学院・院生
劉　雲霞（LIU YUNXIA）
お茶の水女子大学大学院・院生
関口　佳子（SEKIGUCHI YOSHIKO）
横浜市立洋光台第二中学校・教諭
土屋　隆史（TSUCHIYA TAKAHUMI）
横浜市立鶴見中学校・教諭